会話場面での丁寧度について–「依頼行動」における言語表現と行動の違い–

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 峯, 正志, Mine, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00062724

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

論　文

会話場面での丁寧度について
－「依頼行動」における言語表現と行動の違い－

峯　　正志[注1]

要　旨

本稿は，梁(2014)の調査で得られた結果を理論的に解釈することを目的とする。本稿での分析により，「依頼行動」における会話場面での丁寧度を言語表現と行動の両面から見た場合，両者は必ずしも一致しないこと，つまり言葉は丁寧でも行動はあまり丁寧ではないということがあり得ることが明らかになった。さらに，中国語では丁寧度を主として言語表現に頼り，日本語では主として行動に頼って丁寧度を調節している可能性があること，そして日本語が会話場面の丁寧度を言語表現より行動で示そうとするのは，「依頼」の難度を相手に察してもらおうとしている可能性があることを示した。

はじめに

私たちは会話するとき，相手との人間関係や会話の内容に応じて言語表現の丁寧度を調節している。親しい人と話すときは打ち解けた会話をするし，あまり親しくない人に何か依頼をするときは非常に丁重に話す。これらを制御するルールは言語ごとに異なっており，母語以外の言語で適切に発話することは上級話者であっても難しい。これらの違いは言語表現に限られるわけではなく，言語以外の面でも現れうる。表情や身振りだけでなく，服装などにも違いは見られるであろう。このように，ある会話場面の丁寧度の違いは，言語表現だけでなく行動面にも現れうるのである。このようなことは学術的な研究を俟つまでもなく，常識でも当然そのように考えられる

しかし，言語表現と行動は常に一致するのであろうか？場面が異なっても同じように丁寧度が推移するのだろうか？「本音と建て前」のように，口と行動は必ずしも一致しないことがあるのではないだろうか？例えば，口では丁寧に話していても，その行動を見るとそうでもないということはありえないだろうか？

本稿はその二つの変異の仕方は必ずしも一致せず，またその異なり方もすべての言語で同じ様相を示すわけでない可能性があることを示す。

Ⅰ．本稿における「言語表現」と「行動」とは

まずこの章で，本稿で言う言語表現および行動とはどのようなものを差しているのかを明確にしておきたい。なお，本稿で分析の対象とするのは様々な言語活動の中でも特に「依頼」において用いられるものである。

「言語表現」とは，その場の丁寧度に合わせて言語表現そのものがくだけた形になったり改まった形になったりすることを指す。

これに対して本稿における「行動」とは，服装や身振りなどではなく，以下の定義によるものに限定するものである。つまり，依頼を行う際に依頼相手に対して様々な前置き要素（依頼表現の後に現れる場合もある）を用いることを指す。これには，呼びかけ，事情説明，謝罪など，意味的に様々に分類される要素がある[注2]。

言語表現および行動が場面の丁寧度に応じて変化したり増減したりすることは常識的に考えても明らかである。言語表現については日本語では敬語という特別な言語形式が存在するし，他の言語においても，そのための特別な形式はないとしても様々な配慮表現が存在し，丁寧度に応じて使い分けている[注3]。行動においても依頼しにくい場合は様々な前置きが伴うことは日常経験することである。蒲谷・川口・坂本（1998）には，このことについての直接の記述はないが，「用件レベル[注4]」についての説明の部分で，用件レベルが上がるにつれて，すなわち依頼の内容が受け入れにくくなるにつれて，「より複雑な展開，段階を踏んだ『文話』の構成が必要になってくる」とあり，次第に前置き要素が増えてくることを例示している[注5]。峯・梁（2016）はそのことを利用して，様々な会話場面の丁寧度を前置き要素の多寡を量的に測定することによって判定することを目指したものであった。

ここまでは常識的に理解出来ることである。しかしこの両者が同一場面で全く同じように変化するのであろうか。この点に注目した研究は，管見では見られない。というより，会話の丁寧度を問題にする場合，言語表現にのみ注目するものしか見られず，行動に注目するものは見られない。このことは，行動は注目するまでもなく，言語表現と同じように変化すると考えられてきたのではないか。同じように変化するのであれば，行動そのものを測定する意味がない。それより形ではっきり現れる言語表現の違いに注目した方がよい，という風に考えられてきたのではないだろうか。

II．梁(2014)のデータから分かること

筆者もそのように思っていたが，そのことに疑義を生じさせるデータを示したのが梁(2014)である。この研究は，「依頼」という言語活動を取り上げて，日本語を学んだ中国語話者は日本語を学んだことのない中国語話者より，より丁寧な中国語を話すのではないか，言い換えれば，日本語を学んだ中国語話者は，中国語を話す場合にも日本語の干渉を受けるのではないかという点をアンケート調査によって分析しようとしたものである。そして，この調査の結果が上記の言語表現と行動の違いに注目するきっかけとなったのである。そこで，この章ではこの研究の概要を示してみたい。

調査方法は次のようなものであった。比較するグループは①日本語を学んだ中国語話者と②日本語を学んだことのない中国語話者である。①のグループは北京師範大学日本語学部2年生および3年生の39人，②のグループは北京師範大学および中国農業大学の学生の41名である。彼らに，依頼相手が「親しいか親しくないか」，「年上か同年か年下か」，依頼内容が「難しいか優しいか」という組み合わせで出来る12の場面について，「中国語で」どのように依頼するかを聞いたのである。

そして，その結果は次のような二つの別な方法で分析した。一つは，言語表現に注目し，直接的な依頼表現か間接的な依頼表現かを主な基準とし，得点をつけてその平均値を比較するという方法。もう一つは，行動面に注目し，依頼表現の前後に見られる＜呼びかけ＞，＜事情説明＞，＜謝罪＞などの前置き要素をいくつ使っているか数え，その平均値を比較するという方法である[注6]。つまり，アンケート結果を言語表現の面と行動の面の両面から分析してみたわけである。なぜそうしたかというと，異なる方法で結果が一致すれば，その結果の正しさが確実になると考えたからであった。

ところが，結果は予想に反したものだった。確かに言語表現面においても行動においても，12の場面のうちある一つの場面において，二つのグループで有意差が現れたのだが，その現れた場面が一致しなかったのである。双方の結果が一致するものと考えていた筆者たちには意外な結果であった。すなわち，言語表現面においては最も依頼しやすい場面(親しい・年下・易しい依頼[注7])に有意差が現れ，行動面においては最も依頼しにくい場面(親しくない・年上・難しい依頼)に有意差が現れたのである。この論文そのものは，「日本語学習が母語の使用に影響を与える」という仮説を検証するという当初の目的を果たしているが，ここで，なぜ言語表現と行動で違いが表れるのかという新たな問題が生じた。梁(2014)では結果の提示のみに終わり，その言語学的な意味については追求していない。

もちろん，このデータが信頼できるのか，もっと大規模な調査をしてもこのような

差が出てくるのかを探るのがもっとも重要なことであろうが，本稿ではひとまずこのデータが正しいものとして，この事実の持つ意味について考えてみたい。

Ⅲ．言語表現と行動における有意差出現の場面が異なる理由

会話の丁寧度が上がるにつれて前置き要素の使用も増える。これは常識でも分かることだが，有意差が現れた場面では，中国語話者と日本語学習者の丁寧度の差が非常に大きい場合であると考える。つまり元々の差があまりに大きいが故に，日本語学習の干渉が有意差を生じるほど影響を与えたのだと考えられる。元々の差が小さければ，たとえ日本語干渉があったとしても，統計的に有意差が現れないであろう。では，一体どの場面で，日本語と中国語は丁寧度の差が最も大きくなるのであろうか。

データによれば，有意差が現れていないような場面でも，いずれも日本語学習者の方が丁寧度は高くなっている[注8]。ということは，日本語母語話者は，言語表現についても行動においても，どのような場面でも中国語母語話者より丁寧なのではないかと思われる。そうであるが故に，日本語を学んだ中国語話者は，中国語を話す場合でも，日本語を知らない普通の中国語話者よりもっと丁寧に話すようになるのであろう。しかし，言語表現と行動で有意差の現れた場面が異なるということは，丁寧度の差が大きい場面が言語表現と行動では全く異なるということである。

まず言語表現の面を見てみると，依頼しやすい場面（年下，親しい，簡単な依頼内容）では，丁寧度が，

日本語：高い；　中国語：低い

という状況があり，依頼しにくい場面（年上，親しくない，難しい依頼内容）では，

日本語：高い；　中国語：高い

という状況があった。こうなれば依頼しやすい場面で丁寧度の差が最大になるから，有意差が現れるということになろう。

一方，行動の面を見てみると，依頼しやすい場面（年下，親しい，簡単な依頼内容）では，丁寧度が，

日本語：低い；　中国語：低い

という状況があり，依頼しにくい場面（年上，親しくない，難しい依頼内容）では，

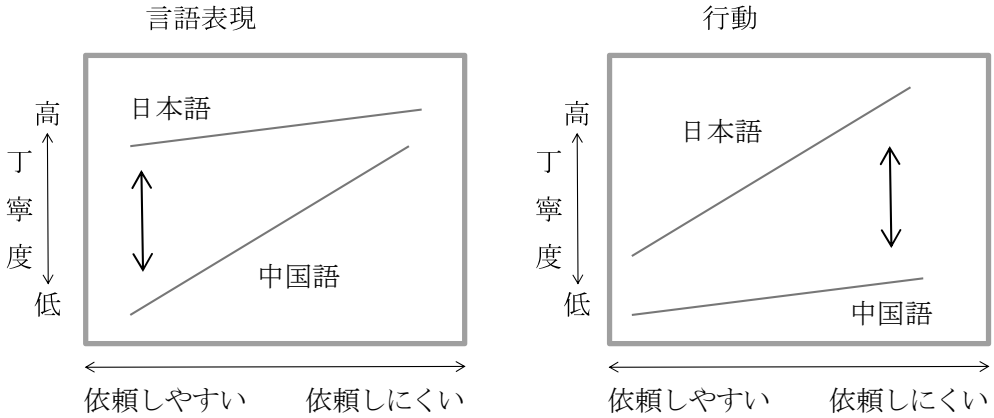
日本語：高い；　中国語：低い

という状況があった。こうなれば依頼しにくい場面で有意差が現れるということになろう。

このように考えることで，梁（2014）のデータで現れた現象を上手く説明することが

出来る。

以上の仮説を図で表すと下のようになる。



Ⅳ．言語表現と行動による丁寧度を元にした言語の類型

言語表現と行動がこのように乖離することがあるとするなら，世界の言語においてどのような類型が考えられるだろうか？

本稿で見たようにまず二つのタイプが考えられる。第一は中国語のような類型が考えられる。すなわち，言語表現は大きく変化するが，行動の方はそれほど大きく変化しないタイプである。二番目には日本語のような類型，すなわち言語表現は大きく変化しないが，行動の方が大きく変化するタイプ。

三つ目として両方が同じように推移するタイプが考えられるだろう

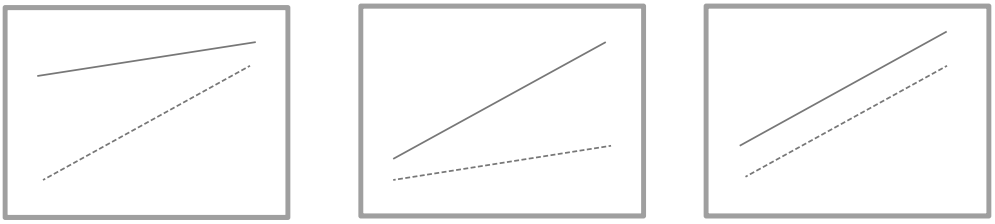
理論的には４番目のタイプ，つまりどちらもあまり変化しないというパターンも考えられるが，それは言葉も行動も丁寧度に従ってあまり変化しないという，社会言語学的にほぼあり得ないパターンであるから，これはおそらく見られないのではないか。

他の言語，例えば英語はどのパターンを示すかは面白い問題だが，データがないため判断出来ない。ただ次章で述べる筆者の仮説が正しいとすれば，中国語と同様の類型に属する可能性があるのではないか筆者は推測する。

以下に可能な三つの類型を図示する

①　日本語タイプ　　②中国語タイプ　　③第三タイプ

上の線が言語表現；下の線が行動



依頼易　　依頼難　　依頼易　　依頼難　　依頼易　　依頼難

Ⅴ．なぜ日本語では前置きが長くなるのか

このことが事実であると考えた場合，なぜ中国語話者と日本語話者でそのような違いが生じるのか？その一つの可能性として，日本語が察しの言語であることがその理由ではないかと考えられる。

日本語では言いたいことを直接は言わず，相手に察してもらうことを期待する性格がある。様々な文献で日本語のこの特徴について言及されている[注9]が，例えば，日本語記述文法研究会編(2009)p.297には，「依頼－断りの談話展開」として，親しい友人同士の依頼・断りの例として次の例が挙げられている。

A「あの，ちょっと今いいかな？」(相手の状況の確認)

B「うん。なに？」

A「明日の午後，空いてる？」(相手の状況の確認)

B「ん？　なんで？」

A「あのね，明日の午後，サークルの新入生歓迎会の案内状を作るのを手伝ってくれって，C君に頼まれたんだけど」(理由・状況の説明)

B「あー」

A「私，明日の午後，バイト入ってちゃっててさ」(理由状況の説明)

B「あー」

A「悪いんだけど，代わりに手伝ってあげてくれないかな」(依頼)

(後略)

そしてこれについて，「上の例に見られるように，断りの談話では，断りを表す直接的な表現(「だめだ」「いやだ」など)は用いず，理由・状況の説明をすることで，相手に察してもらえるように仕向けることが多い。」としている。

もちろん依頼や断りをするときでも，頼みやすい内容や断りやすい内容の場合は

日本語でも直接的に表現する場合もあるだろう。しかし，依頼しにくい場合，断りにくい場合は直接言うのは憚られる。そのような場合にこのように前置きを長くすることによって，依頼内容の難しさや断るという結論を予め相手に察してもらうストラテジーを取ったのであろうと推測できる。日本語の場合は上述したように言語表現がどのような場合でも比較的丁寧に表されるため，このような方法でしか示しようがなかったのではないかと思われる。

これに対して，中国語は日本語と異なり，察してもらうよりも依頼をはっきりと言うようである。李(2005)によると，日本語は途中まで言って後を省略する依頼の仕方をするが，中国語では単刀直入に依頼するとのことである。このような依頼の仕方をする言語においては，前置きを長くして依頼内容を察してもらうより，言語表現で丁寧度を表現する方が確かに便利であろう。

前章で英語は中国語タイプではないかと述べたが，英語は典型的な話し手責任の言語であり，察しを期待しない言語であるというのがその理由である。しかし実際にどうであるかは，当然のことながら調査をしてデータを改めて検証する他はない。

Ⅵ．結論

以上のことをまとめてみると以下のようになる。

会話場面における丁寧度は，言語表現と行動が常に一致して推移するとは限らず，言語ごとに特徴的な推移の仕方をする可能性がある。梁(2014)のデータの示すところによれば，日本語は，言語表現はなだらかに変化するが行動は場面の要求する丁寧度に応じて大きく変化する。一方中国語は，言語表現は大きく変化するが，行動においてはなだらかに変化する。言い換えれば，会話場面の丁寧度を，日本語は主として行動で調節しているのに対し，中国語は言語表現で調節している可能性がある。そして，日本語において，もし行動で丁寧度を調節しようとしているとすれば，それはコミュニケーションにおいて察しを期待するという日本語の性格に起因する可能性を指摘した。

おわりに

本稿で述べたことはあくまで仮説であり，今後はさらに多くのデータの収集・分析によりこの仮説の検証をしなければならないということは言を俟たない。それと同時に，行動による会話場面の丁寧度の測定法の検証，改良も進めていかなければならない。それらについては今後の課題としたい。

【謝辞】

本稿で用いたデータは梁雨馨氏から提供されたものです。使用を快諾していただいた梁氏に心から感謝いたします。

【注】

1　金沢大学国際機構

2　梁(2014)の調査では７種の要素が現れた。それらは，呼びかけ，事情説明，状況確認，詫び，保証，感謝，依頼である。ただし依頼の前置き要素だけを問題にするのであれば，本来依頼は含めるべきではない。

3　外国語に敬語がないと思い込んで失敗する例は枚挙にいとまがない。例えば鶴田・ロシター・クルトン(1988)，脇山・佐野(2000)などを参照のこと。

4　用件レベルとは，「依頼内容」が「相手」にとって実行することの「当然性」に基づくレベル分けである。本稿で言う「依頼内容の難しさ」とは厳密には合致しないが，当然性が低くなれば依頼内容を相手が受けることは難しくなり，かなりの程度合致するものと考えられる。同書p.138参照のこと。

5　同書p.140ff.

6　なお，この時点ではこの方法の有効性は確認していない。この方法の有効性について論じたものが，峯・梁(2016)である。

7　12の場面の丁寧度の違いの順位付けは難しいけれども，最も難しい場面と最も容易な場面は直感的に理解出来るであろう。

8　梁(2014)p.77ff.参照のこと。言語表現についてはすべての場面で日本語学習者の方が丁寧度のポイントが高い。行動については，「顔見知りの同級生」において数値がほぼ同じになるのを除いて，やはり日本語学習者の方が丁寧度のポイントが高い。

9　例えば直塚(1980)p.24ff. では，発言者の隠された意図を考えてしまう日本語話者と，そうでない英語話者の間でのコミュニケーションの失敗例が語られている。日本語は高コンテキスト社会であるとか，聞き手責任の言語であるとかいうことが，察しを期待するという日本人のとるコミュニケーションスタイルの背景にあるのであろう。

【参考文献】

蒲谷宏，川口義一，坂本惠(1998)『敬語表現』大修館書店

鶴田庸子，ポール・ロシター，ティム・クルトン(1988)『英語のソーシャルスキル』大修館書店

直塚玲子(1980)『欧米人が沈黙するとき　異文化間のコミュニケーション』大修館書店

日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法　第７巻　第12部談話，第13部待遇表現』くろしお出版

峯正志，梁雨馨(2016)「会話場面の丁寧度の測定の試み　―談話要素に焦点をあてて―」『金沢大学留学生センター紀要』第19号，p.79-88

李野(2005)「談話的観点から見た依頼表現」『信大日本語教育研究』第５号，p.2-17

梁雨馨(2014)「日本語の学習が母語の中国語に与える影響　―依頼表現の分析から―」『2013-2014年度日本語・日本文化研修留学生研修レポート集』金沢大学留学生センター

脇山怜，佐野キム・マリー(2000)『「英語モード」で英会話　これがネイティブの発想法』講談社インターナショナル

The Degree of Politeness in Linguistic Expression and Behavior

How Are They Different?

MINE Masashi

Abstract

The aim of this paper is to interpret and put into theory the finding of Liang (2014), who points out that Chinese students who have studied Japanese speak more politely even when they speak in Chinese than students who don't know Japanese, and that the degree of politeness of their linguistic expression doesn't necessarily match their actual behavior (here, "behavior" is defined as "pre-sequences" to an action such as request). The author concludes that the discrepancy between them comes from the difference between the two languages on how to adjust the degree of politeness: Chinese depends heavily on linguistics expression while Japanese depends mainly on behavior to adjust it. The author also points out that this character of Japanese possibly comes from its communication style, in which the listener's inference to the speaker's intention is strongly expected.